



132983



日文 701740551

海宮久孝

美華集注釋



卷第九

中央公論社

萬葉集注釋第九卷 奥附

昭和三十六年六月十五月初版 昭和四十九年九月二十日十六版

著者澤瀉久孝

發行者高梨茂

印刷者山田博

印刷所株式會社三陽社

東京都板橋

區板橋四丁目四七番七号

發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地

振替

東京三四番

定價三千圓

本文抄造

三菱製紙株式會社

表紙麻布

望月株式會社

製本所

小泉製本株式會社

製函所

加藤製函印刷株式會社

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。たとへば教（略教）とあるは二つの底本には「敷」とあるを略解によつて改めた事を示し、女（代）とあるは底本をはじめ諸本に無いものを代匠記によつて補つたものである。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首についてどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、

訓詁の參考にすると共に、古寫本の新なる發見に備へる事も出來ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六・六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字體（當用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原本又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「尔」（二六四）、「与」（二六五）、「乱」（二七〇）、「綱」（二八六）の如きである。

一、原文の下注記（類、十二・四六）は類聚古集第十二卷四十六頁の意であり、（古、五・一二才）とあるは古葉略類聚鈔第五册十二丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の卷は八、九、十、十二と、卷名不明の卷との五册であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに従つた。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（四・三）とあるは卷四にある七七一番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の卷の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下に數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと記した。古事記も中卷、下卷など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段數をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは（享）（群）と注した。

「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は（高）と注した。類聚名義抄は（佛、上）（法、中）など注したものは観智院本である。色葉字類抄（上）（中）など記したものは三卷本（古典保存會刊）、伊呂波字類抄（一）（二）など記したものは十卷本（日本古典全集所収）である。

一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
金	金澤本萬葉集	細	細井本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	陽	陽明文庫本萬葉集（京都大學所藏。校本に溫故堂本とある親本）
天	天治本萬葉集	矢	大矢本萬葉集
元	元曆（校）本萬葉集	京	京大本萬葉集（校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏）
類	類聚古集	無	無點本萬葉集
古	古葉略類聚鈔	附	附訓本萬葉集
尼	尼崎本萬葉集	寬	寬永本萬葉集
冷	冷泉本萬葉集	仙	萬葉集註釋（仙覺抄ともいふ）
文	金澤文庫本萬葉集	拾	萬葉集拾穗抄
王	傳王生隆祐筆本萬葉集	管見	萬葉集管見
嘉	嘉曆（傳承）本萬葉集		
紀	紀州本萬葉集（校本に神田本とあるもの）		

代 萬葉代匠記 契 沖

(引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、
片かなを用ゐたものは精撰本)

新考 萬葉集新考

(安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書がある
ので、井上氏新考と記したところがあるが、
安藤氏のものは引用するところが少く、單に新
考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍
書保存會刊行のものと國民圖書株式會社刊行の
ものとあり、主として前者によつたが、「増訂」
と記したところは後者によつたものである。)

童 萬葉集童蒙抄 荷田 信名

考 萬葉考 賀茂 眞淵

槻 萬葉集槻乃落葉 荒木田久老

玉 萬葉集玉の小琴 本居 宣長

略 萬葉集略解 加藤 千蔭

檜 萬葉集檜嫗手 橘 守部

攷 萬葉集攷證 岸本由豆流

古義 萬葉集古義 鹿持 雅澄

註疏 萬葉集註疏 近藤 芳樹

動植正名 萬葉古今動植正名 山本 章夫

美 萬葉集美夫君志 木村 正辭

文字辨證 萬葉集文字辨證 木村 正辭

字音辨證 萬葉集字音辨證 木村 正辭

訓義辨證 萬葉集訓義辨證 木村 正辭

増、選 増訂本萬葉集選釋 佐佐木信綱

口譯 口譯萬葉集 折口 信夫

總索引 萬葉集總索引 正宗 敦夫

新講 萬葉集新講 次田 潤

新訓 新訓萬葉集 佐佐木信綱

講義 萬葉集講義 山田 孝雄

新解 萬葉集新解 武田 祐吉

新釋 萬葉集新釋 澤瀉 久孝

(伊藤左千夫氏にも同名の著がある。その場合
は著者の名をあげた。)

私解 萬葉集私解 花田比露思

全釋 萬葉集全釋	鴻集 盛廣
難語難訓攷 萬葉難語難訓攷	生田 耕一
秀歌 萬葉秀歌	齋藤 茂吉
評釋篇 柿本人麿評釋篇	齋藤 茂吉
雜纂篇 柿本人麿雜纂篇	齋藤 茂吉
新見 萬葉集新見	森本 治吉
講話 萬葉集講話	澤瀉 久孝
小徑 萬葉集小徑	土屋 文明
古徑 萬葉古徑	澤瀉 久孝
作品と時代 萬葉の作品と時代	澤瀉 久孝
新校 新校萬葉集	澤瀉 久孝
定本 定本萬葉集	佐伯 梅友
染草考 日本上代染草考	佐佐木 信綱
植物新考 萬葉集植物新考	武田 祐吉
動物考 萬葉動物考	上村 六郎
續動物考 續萬葉動物考	松田 修
兵庫篇 萬葉地兵庫篇	東 光治
理研究	東 光治
	阪口 保
	増田 徳二

大和志考 萬葉大和志考	奥野 健治
山代志考 萬葉山代志考	奥野 健治
全譯 全譯萬葉集	武田 祐吉
全註釋 萬葉集全註釋	武田 祐吉
(改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、増訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。)	
評釋 萬葉集評釋	
(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏に同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)	
評釋 評釋萬葉集	佐佐木 信綱
(これも著者の名を附した。)	
大成 萬葉集大成	平凡社版
私注 萬葉集私注	土屋 文明
歌人の誕生 萬葉歌人の誕生	澤瀉 久孝
古典大系本 古典文學大系本萬葉集	高木 市之助
	五味 智英
	大野 晋

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學國文學會

山邊道 天理大學國文學研究室

一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、祁^ケ、古^コ、蘇^ソ、刀^ト、努^ノ、比^ヒ、敝^ヘ、美^ミ、賣^メ、用^ヨ、路^ロ

(乙類) 紀、氣、許、曾、止、乃、非、閑、未、米、余、呂

萬葉集注釋卷第九

萬葉集卷第九

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇御製歌一首 (二六四)	一三
岡本宮御宇天皇幸紀伊國時歌二首 (二六五、二六六)	一六
大寶元年辛丑冬十月幸紀伊國時歌十三首 (二六六—二七九)	一七
後人歌二首 (二八〇、二八一)	二一
獻忍壁皇子歌一首 詠仙人形 (二八二)	三三
獻舍人皇子歌二首 (二八三、二八四)	三四
泉河邊間人宿祢作歌二首 (二八五、二八六)	三七
鷺坂作歌一首 (二八七)	三九
名木河作歌二首 (二八八、二八九)	四一
高島作歌二首 (二九〇、二九一)	四四

紀伊國作歌二首 (二六九、二六九〇)	四六
鷺坂作歌一首 (二六四)	四九
泉河作歌一首 (二六五)	五一
名木河作歌三首 (二六六—二六八)	五二
宇治河作歌二首 (二六九、一七〇〇)	五四
獻弓削皇子歌三首 (一七〇一—一七〇三)	五九
獻舍人皇子歌二首 (一七〇四、一七〇五)	六三
舍人皇子御歌一首 (一七〇六)	六五
鷺坂作歌一首 (一七〇七)	六六
泉河邊作歌一首 (一七〇八)	六七
獻弓削皇子歌一首 (一七〇九)	六八
柿本朝臣人麻呂歌集歌二首 (一七一〇、一七一一)	六九
登筑波山詠月歌一首 (一七一二)	七一
幸芳野離宮時歌二首 (一七一三、一七一四)	七二
槐本歌一首 (一七二五)	七四

山上歌一首 (一七六)	七六
春日歌一首 (一七七)	七七
高市歌一首 (一七八)	七八
春日藏歌一首 (一七九)	七九
元仁歌三首 (一八〇—一八三)	八〇
絹歌一首 (一八三)	八三
鳥足歌一首 (一八四)	八四
麻呂歌一首 (一八五)	八五
丹比真人歌一首 (一八六)	八六
和歌一首 (一八七)	八八
石川卿歌一首 (一八九)	八九
宇合卿歌三首 (一九〇—一九三)	九〇
基師歌二首 (一九三、一九四)	九四
小辨歌一首 (一九四)	九七
伊保麻呂歌一首 (一九五)	九七

式部大倭歌一首 (二三〇)	九八
兵部川原歌一首 (二三三)	一〇〇
詠上總末珠名娘子一首并短歌 (二三八、二三九)	一〇二
詠水江浦島子一首并短歌 (二四〇、二四一)	一〇七
見河內大橋獨去娘子歌一首并短歌 (二四二、二四三)	一二八
見武藏少埼沼鴨作歌一首 (二四四)	一三三
那賀郡曝井歌一首 (二四五)	一三四
手綱濱歌一首 (二四六)	一三七
春三月諸卿大夫等下難波時歌二首并短歌 (二四七—二五〇)	一三九
難波經宿明日還來時歌一首并短歌 (二四八、二四九)	一四六
檢稅使大伴卿登筑波山時歌一首并短歌 (二五三、二五四)	一五〇
詠霍公鳥歌一首并短歌 (二五五、二五六)	一五七
登筑波山歌一首并短歌 (二五七、二五八)	一六一
登筑波嶺爲耀歌會日作歌一首并短歌 (二五九、二六〇)	一六五
詠鳴鹿歌一首并短歌 (二六一、二六二)	一七三

沙弥女王歌一首 (一七五)..... 一七五

七夕歌一首并短歌 (一七四、一七五)..... 一七六

相聞

振田向宿祢退筑紫國時歌一首 (一七六)..... 一八一

拔氣大首任筑紫時娶豐前國娘子初兒作歌三首 (一七六—一七八)..... 一八三

大神大夫任長門守時集三輪河邊宴歌二首 (一七六、一七七)..... 一八六

大神大夫任筑紫國時阿倍大夫作歌一首 (一七七)..... 一八八

獻弓削皇子歌一首 (一七七)..... 一九〇

獻舍人皇子歌二首 (一七四、一七五)..... 一九一

石河大夫遷任上京時播磨娘子贈歌二首 (一七六、一七七)..... 一九四

藤井連遷任上京時娘子贈歌一首 (一七八)..... 一九六

藤井連和歌一首 (一七七)..... 一九八

鹿島郡苅野橋別大伴卿歌一首并短歌 (一七八、一七九)..... 一九九

與妻歌一首 (七六三)	二〇四
妻和歌一首 (七六三)	二〇五
贈入唐使歌一首 (七六四)	二〇八
神龜五年戊辰秋八月歌一首并短歌 (七六五、七六六)	二〇九
天平元年己巳冬十二月歌一首并短歌 (七六七、七六八)	二一二
天平五年癸酉遣唐使舶發難波入海之時親母贈子歌一首并短歌 (七六九、七七〇)	二一六
思娘子作歌一首并短歌 (七七一、七七四)	二一八

挽歌

宇治若郎子宮所歌一首 (七九五)	二二四
紀伊國作歌四首 (七九六—七九九)	二二六
過足柄坂見死人作歌一首 (八〇〇)	二二九
過葦屋處女墓時作歌一首并短歌 (八〇一—八〇三)	二三三
哀弟死去作歌一首并短歌 (八〇四—八〇六)	二三九